

仏教図像の研究
— 図像と経典の関係を中心に —
論文概要書

小山 満

論文概要書

1. 本論文の目的

(1) 図像と経典の関係を明らかにする

本論文『仏教図像の研究－図像と経典の関係を中心に－』は、仏教図像の諸様相について、図像と経典の関係を明らかにして、美術史としての研究を一步推し進めたものである。対象は中央アジア、中国、そして日本の大乘仏教の図像であり、時代は紀元2世紀から8世紀のおよそ700年間を範囲としている。

大乘仏教という基盤的な背景から考えても、美術作品の実体を紐解くには、その元になる典拠があるはずという視点は欠かせないと思われるが、本論文全体の主題は、この経典による図像の解明をめざしたものであり、それぞれの典拠による解きほぐし、すなわち仏教図像の読み解きという視点に一つの独自性を見出している。

ただ、歴史を超越しがちな仏教経典の記述からだけでは、どれだけ史実を求められるかは疑問とする考え方も確かにあり、あるいは、壁画や遺品は経典と結びつくとは限らず、安易な付会は許されないと指摘する人もいる。本論文で試みた図像の解明に対して、内容上安易な付会であると批判するのは、あくまで部分的な手段上での批判であり、全体的な図像の解明という目的に対するものではないと思う。

本論文では、文献に対応するできるだけ明らかな図像例を選んだことから、周辺のフォローが不足して総体として荒削りであるとの批判は甘んじて受けなければならないが、今後更なる作例を加え補充していくことで、経典と図像の関係がいつそう明らかにされていくと考えている。

したがって、もし壁画や遺品は経典と結びつくとは限らないとする見解に固執することにより、それが結果的に経典の資料を軽視することにつながり、問題解決の手段をみすみす捨ててしまい、仏教図像学としてその一分野を切り捨てる行為になってしまうのではなかろうかと思う。したがって、経典と図像の関係を明らかにする視点と努力は、それらがたとえ結びつかない場合でも持ち続けていくことにおいて間違っていないと思う。

(2) 年代の比定

本論文では、図像と史料という美術史研究の基本的手法を駆使して遺跡や遺物の年代を明らかにすることにも十分注意したつもりである。すなわち、美術史、考古学、歴史学、そして仏教文献学等に基づいて、美術品の示す歴史を解明しようと心掛けているということである。とくに美術品の制作年代の比定においては、科学的な炭素年代によるデータを重視するなどして、できる限り普遍的な結果を求めることに力を入れている。

本論文では、第Ⅰ部から第Ⅲ部まで、いずれの章においてもこれまで到達した水準を一步超えることをめざしているが、それが達成されて斯学における学問の進展に寄与することになれば本望である。これまで美術史研究が、歴史研究の補助学問であるという世間の常識に対して一矢報いることになれば幸いである。

(3) 仏教東漸史の究明

本論文では、仏教東漸史を明らかにすることも視野に入れて研究に励んだ。とくに小乗と大乘の仏教運動の違いは、仏教東漸史の過程において、これまで未解明のまま残されている部分があり、それらをどのように理解するかは、今後委ねられた課題でもある。

本論文においては、第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像から、第2章『観無量寿経』による大神変図、第3章四天王の奉鉢と弥勒がこの問題に関係している。そして第4章の『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わりにおいて、バーミヤーンとキジル石窟の活動年代が6世紀に位置づけられることを明らかにした点は、これまでの通説と異なる仏教東漸の新たな歴史像を提示するものと考えている。

第Ⅱ部の中国における経典と図像の関係では、対象とした仏教寺院がすべて初建というわけではなく、後代における重修や再建の場合もあり、これを視野に入れて考察する必要があると感じてその究明を心がけている。第3章の『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図はその一例であり、再建や重修という仏教寺院における問題の新たな視点として注意を喚起するはずである。

第Ⅲ部のわが国における経典と図像の関係では、第3章の薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』において、擦銘にいう薬師如来が4種の『薬師経』のどれを典拠としたかを明らかにして、わが国へ流布した仏教の歴史を考えてみたものである。

(4) 法華経の関わりを検証

本論文においては、仏教経典の最高峰と謳われる『法華経』による作例がいくつか明らかになりこれを検証した。第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像、第Ⅱ部第1章曇曜五窟と『法華経』、第3章『法華経』と隋代の敦煌石窟、第Ⅲ部第1章中宮寺天寿国繡帳と『法華経』、第2章法隆寺夢殿八角円堂と本尊などがこれに関係する。むろん他の資料も探り思索を重ねた結果明らかになったことであるが、『法華経』による作例は、中央アジア、中国、日本の三地域でいずれも見出すことが出来ており、大乘仏教経典の最高峰と謳われるその意義を史実の面で明らかにできたと考えている。

2. 本論文の方法

(1) 遺品と文献史料とデータの照合

本論文の図像と史料の関係においては、美術品の作例（遺品）と文献史料と科学的データを照合することを基本とした。美術史研究においては、美術品が中心となることは当然であるが、これが文献史料（資料）とどこまで結びつくか、それによって、その作品の美術史的価値が決まると言ってもいいと思う。しかし資料、特に仏典は、思想的背景があるので、その思想的背景を理解して用いることも心掛けることとした。また、研究は考古学的調査の進展と平行し、歴史研究の進歩とも関連するので、この照合もできる限り行った。

とくに発掘調査により新たな成果が得られ、遺構や出土品の様式や年代が確定されることを通してさらに確信を深めることにもなった。最近明らかになった奈良斑鳩法隆寺南大門前の発掘調査で、法隆寺再建論争の『日本書紀』西暦670年の罹災記事を裏付ける結果をもたらしていることなどは、その好例である。これは第3章薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』の

中で触れている。

そして、なかでも炭素年代の測定結果は、誤差があるにしても貴重な裏づけとして用いることが出来ている。本論文においては、第Ⅰ部第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わりがその一例である。

(2) 先行論文の検証

各章の研究にあたって、先学の論文をふまえてその一歩先をめざしている。先学の研究を広く参照し吟味することで、自己のオリジナリティーを生み出す貴重な宝庫の役割を果たしていることは言うまでもない。本論文中第Ⅰ部第1章『法華経』より見た神変像、第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わり、第Ⅲ部第3章薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』、第4章法隆寺金堂四大壁画と経典などが、とくに先学の論文多数の恩恵を受けているものである。

(3) 他の領域との連動

考古学や実地調査、仏教哲学や仏教史など、美術史以外の領域とテーマが交錯する場合は、領域が違うという問題を引き起こすことになる。けれども、学問の探求において、他の領域とも連動して広く参照し総合的に考察して、最も妥当とする結論を導き出すことが本来の目的である。したがって、本論文でもこの手法を取り入れている。第Ⅰ部第4章『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わりや、第Ⅱ部第4章『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図などがこれと深く関係している。

3. 本論文の内容

第Ⅰ部 中央アジアにおける仏教図像と経典

第1章 『法華経』より見た神変像

ここでは、アフガニスタンのカピシ地方より発見された仏像のうち、神変像とよばれる一群の同一様式に対して『法華経』の品々との対応関係を明らかにして、その制作年代を推定した。研究の発端は、これまで当該研究において大乘仏教からの考察があまりなされていないことに疑問を持ったことに始まる。

はじめに双神変の示される『法華経』妙莊嚴王本事品第27の記載と、パイターヴァ出土の焰肩仏坐像を解明の手がかりとして、またザベルセラージュユ出土の双神変像浮彫では、向かって左側の4段に分かれるレリーフの描写と『法華経』提婆達多品第12に説く龍女の男子に変成して成仏する物語が対応すること、そしてまた下部に6体の同品に説く蓮華化生に見えることがその決め手となっている。

パイターヴァ出土の焰肩仏立像浮彫では、仏陀左右の龕に坐す、向かって右側の仏陀の痩せ細った身体の特徴が『法華経』見宝塔品第11に説く多宝仏の禅定の姿、すなわちサンスクリット文で「四肢が痩せ身体衰えた姿」と述べていることに一致する点を裏付けとしている。他の『法華経』序品第1、『法華経』化城喻品第7の作例の場合は、造像の同一様式からの推定である。年代は、発掘報告による伴出したヴァースデーヴァ王コイン（3世紀初頭）を根拠としている。

第2章 『観無量寿経』による大神変図

パキスタンのラホール博物館所蔵のガンダーラ・モハマッドナリー出土の仏説法図は、通説の舎衛城大神変図ではなく、『観無量寿経』による一変相図であることを明らかにした。

1909年、A.フーシェによる釈尊の舎衛城における大神変図として説いた一説が、数多くの反論を受けてなお存在する理由は、何より仏教が釈尊により説かれたという一点に回帰するところにある。研究史を通して明らかになったことは、問題のフーシェ説に向けて放たれた矢は多かったにもかかわらず、我が国でそれらの紹介が不足していたこと。またガンダーラにおける大乘仏教の図像の存在がなかなか明らかにならないこと等であった。

ここでは大乘仏教の思想的特色を通して図像との関係を探り、『観無量寿経』による観想の第6観から第10観の記述がこれに対応すること。そしてその後の第11観から第16観までの記述も当てはまることを明らかにした。とりわけこの経典中の「修多羅（経典）と像想を結びつけよ」とある記述が決め手となっている。

今後に残された課題は、この経典のサンスクリット本が見出されるか否かである。年代は頭冠の大きな花飾りの頻出するクシャノササーン（3世紀後半）からキダーラクシャーン（4-5世紀）の時期に位置づけられる。

また、ガンダーラ・サフリバロール出土の三尊像が、上節の考察から導き出された大乘仏教と関わることについて検討した。すなわち、これまで仏陀と弥勒と観音とした当三尊像は、阿弥陀と観音と勢至のいわゆる大乘経典の『観無量寿経』から理解される阿弥陀三尊像であること。そして当台座浮彫は、左右にアパララ龍王とアングリマーラの帰仏説話が示されるとする従来の捉え方ではなく、『観無量寿経』の序説にいう韋提希夫人とその子阿闍世王の聞法譚として理解できることを明らかにした。

また、三尊形式が浄土経典では成立当初に遡ると指摘されていることも十分考慮すべきであり、菩薩像の多くが弥勒像と同形であることも『観仏三昧海経』で述べている。そして観音と勢至の像は、頭冠装飾の違い以外見分けがつかないと『観無量寿経』で述べていることも参考になる。したがって、いずれも上記同様「修多羅（経典）と像想を結びつけよ」とある『観無量寿経』の記述が決め手である。

第3章 四天王の奉鉢と弥勒

ガンダーラで見出される仏鉢図は『太子瑞応本起経』に記す四天王の奉鉢記事と相応し、その後変遷をたどっていくこと。

チャンディガル博物館所蔵の「弥勒菩薩・大神変図・仏鉢供養を表すガンダーラ浮彫」については、すでに『般舟三昧経』で説く、兜率天上の弥勒（上段）と阿弥陀仏浄土（中段）の組み合わせとする指摘があり、未来仏（弥勒）と現在仏（阿弥陀）という組み合わせとして理解することで納得がいく。すなわち釈迦仏を中心としないという視点を提起するということである。このガンダーラ特有の仏鉢を付すレリーフは『太子瑞応本起経』以降、説話として途切れなく仏典に記載され、かつ増幅されていることが理解される。したがって、これを裏づけとして、仏鉢とともに造像される仏陀が、釈迦の遺法を受け継ぐ弥勒仏としての可能性を示していることを明らか

にした。

第4章 『華嚴経』 ヴァイローチャナ仏の関わり

バーミヤーンの二大石仏について、バーミヤーン石窟全体が従来における通説の4-5世紀ではなく6-8世紀に絞られたとする指摘を基に、各説の検討を行ないその当否を明らかにした。その後、イスラム原理主義のタリバーンによる二大仏爆破(2001年3月)後、ドイツ隊による炭素年代の測定により6世紀代とする結果が出されて、これをさらに支持することとなった。

筆者の指摘は、6世紀に当地を支配する初期突厥(チュルク)の関わりについてであり、これを漢文文献や、碑文、東ローマの史料等で検討した。その結果、6世紀後半の突厥ディザブロス(室点密)の関わりがクローズアップされ、突厥の受容した当時の仏教は主に華嚴教で、主尊が毘盧遮那(ヴァイローチャナ)仏であること、壁画に辮髪姿の仏菩薩が描かれていること、またチュニックの供養者やリュトン等が、突厥の塞外民族としての関わりを明らかにしていること等を裏付けとして論述した。

また、バーミヤーンとキジルの石窟でともに辮髪姿の仏菩薩が見出されることから、両者の関係性を明らかにした。すなわち、バーミヤーンで指摘した突厥(チュルク)の関わりが、そのままキジルにおいても考えられること。それはまず突厥の治所がキジル石窟に近く、また一般に小乗の仏教王国として知られるキジル石窟でも、この時期に大乘仏教を好む王がいたこと、そしてキジル石窟の壁画年代が炭素年代による測定で、6-7世紀を示す結果が出されたこと等を裏付けとしている。

第II部 中国における仏教図像と経典

第1章 曇曜五窟と『法華経』

雲岡の北魏石窟における曇曜五窟で共通して見出される『法華経』特有の二仏並坐表現を手がかりに、『法華経』品々との対応関係を見出し、第16窟神力品、第17窟涌出品、第18窟宝塔品(釈迦仏)、第19窟宝塔品(多宝仏)、第20窟化城喻品となることを明らかにした。五窟に共通して見出される二仏並坐表現とは、虚空に涌出した宝塔の中で、多宝仏が釈迦仏の説法すべてを真実であると証明し、釈迦仏を宝塔に招き入れ、二仏が並坐する姿を浮彫したもので、内容は『法華経』見宝塔品第11に記載され、他の経典にない特色を持っている。その結果、五窟は『法華経』と深く関わると判断して、以下の研究を推し進めた。

第16窟の本尊は、右手施無畏印、左手弾指の様子から『法華経』如来神力品第21の、大神力により娑婆世界に出現した釈迦牟尼仏が、舌相をおさめて後、弾指して説法する姿であること。

第17窟の本尊は、頭冠と交脚像の様子から『法華経』従地涌出品第15の、釈尊の次に作仏する弥勒菩薩を表わしていて、左右の二仏は、東壁坐像が五十小劫の間坐し続ける釈尊で、西壁立像が当品を説法する釈尊と理解されること。

第18窟の本尊は、衣上の多数の化仏と左右の仏陀が各一人の菩薩を伴うことから、『法華経』見宝塔品第11に記す、釈尊の当見宝塔品説法の場面であること。

第 19 窟の本尊は、入口が凹字形で宝塔形式の石窟を示していて、左右の仏龕に倚坐する仏像が表わされることから、『法華経』見宝塔品第 11 に記す多宝如来の三世における説法と理解されること。

第 20 窟の本尊は、禪定姿の坐仏と脇士の仏陀像が第 5 窟と類似することから、『法華経』化城喻品第 7 の過去仏の大通智勝仏によるその因縁譚として理解されること。

以上の考察により、曇曜五窟は、当時の皇帝即如来思想と、現実的な三世仏思想を背景に『法華経』を典拠とした大乘仏教の一大図像として理解されることを明らかにした。

第 2 章 『弥勒経』と敦煌第 249 窟の窟頂壁画

敦煌莫高窟第 249 窟（西魏）の窟頂壁画は、阿修羅王と帝釈天、あるいは東王父と西王母とする従来の見解に対して、これを弥勒經典による壁画と見て、その照合を通して個々の名称の特定を試みた。すなわち、第 249 窟の窟頂壁画は『弥勒上生経』では、兜率天上に宮殿、垣牆、行樹とともに一大神の牢度跋提神がいると説いているので、これが窟頂西壁に描かれる従来阿修羅王に代わる存在であること、ここに解明の糸口を見出した。そして『弥勒下生経』で説く、梵天に支えられた師子座、宝帳、宝柱、宝女が窟頂東壁に見えること、また兜率天宮の 5 大神が窟頂 4 壁に描かれていること。そしてまた『弥勒下生成仏経』では、轉輪聖王と妃が説かれ、北面と南面にそれぞれ龍車、鳳車に乗り、従者を従えた王（東王父）と妃（西王母）が描かれ、『弥勒下生経』では、この王・王妃が弥勒の父母として捉えられてこれに符合すること。また、龍華樹三会説法が正面本尊と左右の壁面に描かれる説法図で示されていて、後補とされる本尊の僧形について、経の主題が弥勒と集会の衆生の出家であることから推測して、当初から僧形であった可能性があること。以上の諸点を通して、当窟は弥勒に対する信仰を目的に全体が構成された可能性の高いことを明らかにした。

第 3 章 『法華経』と隋代の敦煌石窟

敦煌の隋代における急激な造窟が、歴代皇帝の仏教への帰依にあるとみて、これを壁画上の特色を通して明らかにした。すなわち、わずか 37 年間で 100 窟に及ぶ強烈な造窟運動の、その背景にある隋代皇帝の天台大師智顛へ帰依して勅令した崇仏政策をとりあげた。そしてまたその崇仏の広がり、ひろく衆庶（庶民）に及ぶ様子を、經典や題記資料をもとに明らかにした。なかでも、天台の唱導した『法華経』が大きく影響していることについて写経資料をもとに論じ、壁画に描かれた千仏表現と結びつく可能性を指摘した。一方、壁画の場合でも、従来積尊の伝記（仏伝）の一部とする持経説法図や、乗象入胎図、逾城出家図が、いずれも仏伝としてではなく『法華経』と結びつくことを明らかにした。すなわち、持経説法図が序品の八王子の出家に、乗象入胎図が普賢菩薩の登場する結品および普賢経に、そして逾城出家図が序品の諸仏出家に結びつくという点である。

第 4 章 『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図

龍門古陽洞の古陽洞とある題字と文様、そして歩歩生蓮図や水泉石窟の仏龕の類似性の検討を通して、龍門古陽洞の隋代における大幅な重修の存在を明らかにした。すなわち、『隋書』や「弁証論」などに記す隋代文帝の重修 150 万余軀、煬帝の 10 万余軀などとある記事が、実際に存在

したか否かを知るためである。まず古陽洞の題字が北魏様式でなく、その背景にある皇帝礼仏図とともに隋唐代の様式に近いこと。また南壁列龕の龕楣にある歩々生蓮図は隋唐代の經典から現れることなど、いずれも北魏時代に遡らないことを確認した。また洛陽郊外で新たに発見された、龍門石窟と様式的に近い水泉石窟に追刻部分があり、ここに河南王〜とあることから、史料でみて3人の河南王のうち煬帝の子昭に結びつく可能性の高いことを指摘した。

そして、中国の敦煌石窟に見られる隋唐の美術様式が、北魏時代とされる龍門古陽洞においても見出されることから、隋唐代において古陽洞が重修されたことを明らかにした。すなわち、古陽洞の仏龕文様が、北魏時代に比べ格段に精緻であること。また隋唐代に流行する葡萄唐草文様や、連珠文、メダイオンなどが付せられている点。そして栱門門柱に付く蓮弁束飾りの流行が、古陽洞の列龕にも付されていること。とくに薬方洞栱門北壁の北齊武平6年(575)の碑が削られて蓮弁束飾りの門柱となっていることを見出し、この文様がこの年より後の流行であることを明らかにした。

第Ⅲ部 わが国における仏教図像と經典

第1章 中宮寺天寿国繡帳と『法華經』

中宮寺の天寿国繡帳に見出される天寿国について各所説が、極楽浄土、妙喜浄土、兜率天浄土、靈山浄土、十方の浄土、此土の天竺等に分かれる中で、全体を包含する『法華經』で見られることを解明の糸口とした。また新旧二帳ある天寿国繡帳のうち、鎌倉期の新繡帳で、用語において『法華經』と結びつく特色をあげ、その結果、現存の6断片のいずれも『法華經』品々で解明できることを明らかにした。内容は以下の通りである。

上段右；蓮華に化生する菩薩と、左下部にある連珠文の折れ曲がる部分にヒントを得て、『法華經』結品の普賢品第28による考察が可能であること。

上段左；図中の月にヒントを得て『法華經』薬王品第23の月天子を割り出し、この薬王菩薩に充てる。このほか右上の鳥が『法華經』法師功德品第19の迦陵頻伽鳥に、亀甲は『法華經』妙莊嚴王品第27にいう一眼の亀にあたる可能性を指摘した。

中段右；『法華經』妙莊嚴王品第27の二王子の現じる神変の様子で、像下に跪拝する三人は、仏所に詣でる夫人と二子。右端に青蓮華。在俗人物は襲(おすい)を着ける夫人や女子など。

中段左；中央の執金剛神は『法華經』觀音品第25の觀音三十三身の最後に示される姿で、像下の水や波は海上で遭難し助かる話に結びつく。左上方の三比丘と香炉は『法華經』法師功德品第19の懐妊した女性が安楽に福子を産む場面を想定できること。

下段右；鐘をつく僧と蓑を着て歩む人物は、『法華經』提婆達多品第12の王位を捨てて出家して鐘をつき仙人に法を求める過去世の釈尊の姿として理解でき、鎌倉期の曼陀羅の図像がこの参考になる。

下段左；宮殿の中の人物と仏殿と、持華の女性供養者。ここは『法華經』提婆達多品第12後半の龍女の即身成仏の話として理解でき、同じく鎌倉期の曼陀羅の図像が参考になる。

第2章 法隆寺夢殿八角円堂と本尊

敦煌第 61 窟五台山図に見える八角円堂について、わが国の奈良法隆寺における夢殿八角円堂との類似性に着目してその背景を探った。すなわち、五台山図の八角円堂は大法華之寺に所属する一院で、『広清涼伝』にいう神英和尚の法華院にあたること。わが国法隆寺の夢殿は、建立者行信とその信仰内容から法華経と関係すること。夢殿の本尊は手印から判断して太子を『法華経』安樂行品第 14 の転輪聖王に見立てた可能性があり、その後五台山もわが国も華嚴思想の下で発展するが、ともに天台の影響を受けた状況も続くことを明らかにした。

第 3 章 薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』

奈良薬師寺の東塔擦銘は、薬師寺の平城移転に伴う寺院の移建非移建論争において問題となったが、現在も奈良薬師寺の東塔擦管に刻入された状態で存在する。すなわち、擦銘は平城京で新たに建立された東塔に付けられたわけであるから、基本的に本尊も当然平城京における新鑄されたものとして考えるべきことを示している。しかしこれまでの論争の基底には擦銘が飛鳥藤原京において本薬師寺が存在した時点で、すでにその塔上に付けられていたという仮定に基づいている。

科学的分析では、擦管上の水煙と現金堂月光菩薩の銅の組成が一致し、また現本尊薬師如来の台座内で発見された和銅開珍銭が文字の形態から見て、養老 4 年 (720) を遡らない新鑄銭であると報告されていること。したがって、これらは現薬師寺が移建されたものでないことを裏付けている。

本稿前段では銘文における和様化の要素を取り出して、銘文の誤字、模刻、配列の乱れなどを検討してその信憑性を明らかにし、銘文にいう現本尊の薬師如来が 4 種ある『薬師経』の隋訳に基づくことを明らかにした。後段では、縁起にいう薬師寺の第三本願に元明太上天皇をあてる説に対して、縁起の性格や文献による元明帝の動き、祭祀と比較した当時の仏教の位置づけなどを検討して、祭祀中心の遷都事業をすすめた元明帝がそのまま仏教の薬師寺移転の完成者とはならないことを指摘した。

第 4 章 法隆寺金堂四大壁画と経典

法隆寺金堂の四大壁画について、それぞれ経典の存在を確認し、一号壁が『無量義経』、六号壁が『観無量寿経』、九号壁が『薬師琉璃光七仏本願功德経』、十号壁が『観弥勒菩薩上生兜率天経』に拠ることを明らかにした。加えて制作年代の推定に及び、西暦 707～734 の間とした。

一号壁では、十大弟子の存在を通して、それにふさわしい経典として既に指摘されていた『法華経』序品よりも法華経の開経である『無量義経』に拠ることを明らかにした。六号壁では、観音の持つ手印に注目し、これを述べる『観無量寿経』を検討し、壁画上の九品の衆生それぞれを特定した。九号壁では、左端に描く執金剛神に注目し、薬師経の中の『薬師琉璃光七仏本願功德経』(七仏薬師経)を検討し、中に十二神将の半数が描かれているとの理解に達した。十号壁では、壁画に描かれた菩薩の頭冠などから、四菩薩、獅子座、五大神など、『観弥勒菩薩上生兜率天経』との関係を明らかにした。制作年代は、七仏薬師経が漢訳された 707 年を上限とし、袈裟のつり方に変化の見える興福寺十大弟子像の制作された 734 年を下限とした。

4. 結び

第Ⅰ部、中央アジアにおける仏教図像と經典では、第1～3章でガンダーラとその周辺における大乘仏教の関係について考察した。その結果、第1章でアフガニスタンにおけるカピシ様式が『法華經』の各品に対応することを明らかにし、第2章と第3章で、これまで舍衛城の大神変図として特定されていた図像が、釈尊の小乗教上における仏伝中の物語としての解釈でなく、大乘仏教として発達を始めた阿弥陀仏の世界を觀想する『觀無量壽經』による図像として解釈されることを明らかにした。またサフリバロール出土の三尊像でも、阿弥陀三尊像として理解できることを明らかにした。その結果、ガンダーラ地方では大乘仏教がほとんど発達しなかったとする従来の一般的考え方に対して、これを乗り越える新たな視点を提出することとなった。

第4章では、アフガニスタンのバーミヤーン石窟と中国西域のキジル石窟の、双方に類似して見られる尊像の辮髪表現に着目して、辮髪を風俗とする中国の塞外民族が双方を支配したと考え、突厥による可能性を引き出した。その結果、突厥が中国北朝齊国と交流し、華嚴經典を学んでいることを根拠として『華嚴經』の教主毘盧遮那（ヴァイローチャナ）仏の尊像において、バーミヤーン二大仏と齊国の仏像の類似性を明らかにした。

その後、二大仏爆破後の炭素年代の測定結果により、二大仏の制作年代がいずれも6世紀と出されたことで、筆者の年代比定が裏付けられることとなった。これにより、これまで西暦4世紀説が主流であった当該石窟は、およそ200年下の西暦6世紀を中心とすることが明らかとなり、仏教の東漸史において、いわば逆流現象が見られることを明らかにして、これまでの考え方に注意を促す形となった。

第Ⅱ部、第1章では、中国雲岡石窟のいわゆる曇曜五窟について、五窟すべてに二仏並坐像が見えることを通して『法華經』品々でそれぞれの読解を行った。とくに第18窟と第19窟が釈迦・多宝二仏による見宝塔品第11の儀式の場として五窟の中心にあることを明らかにした点に特色がある。

第2章では、敦煌第249窟の窟頂壁画が、東王父や西王母の描かれた中国の神仙思想の世界であることから、中国の研究者からこれは仏教図像ではないとする見解さえ出されていた。しかし、正面の立像はじめ、描かれたすべての像が弥勒經典で解釈できることを明らかにして、あくまで仏教図像でよいことを導き出した。

第3～4章では、敦煌と龍門石窟が隋代において突出して造像活動に励んだ実態を、壁画と正史の記述をあわせて検討し、重修や再建の背後に歴代皇帝の篤い仏教信仰と、それが広く衆庶に及んだ信仰の中心に『法華經』が存在することを明らかにした。

第Ⅲ部、第1～2章では、現在6つの断片として遺されているわが國中宮寺の天壽国繡帳が、他の図像表現との類似性からみて『法華經』品々で読み解けること、また法隆寺夢殿八角円堂が本尊とともに『法華經』に拠ることを明らかにした。

第3～4章では、薬師寺の東塔擦銘の検討から本尊薬師如来の典拠を隋訳『薬師經』に求め、法隆寺金堂の四大壁画については、各壁の画像の主題がそれぞれ個別の經典に基づくことを明ら

かにした。以上の第Ⅲ部では、わが国の場合でも図像と経典の双方が密接に結びつくことを裏付けている。

さて、中国の仏教図像の研究を進めていくうち、仏獣鏡を検討する中で道教との関係を考える必要性があり、古鏡の図像の観察を通して、古鏡の鈕と乳が道教経典図で見る宇宙観に当たることが知られた。また神獣鏡、画像鏡のいずれも道教経典に説く内容と結びつくことが明らかになった。とくに神獣鏡では鏡径が『抱朴子』にいう修行用の鏡として規定した径九寸（21.6cm）以上にあてはまるものが多く、その記載とともに道教経典の『上清明鑑要経』や『太上明鑑真経』で述べる内容と鏡背の図様が一致した。また、おもに画像鏡に描かれた西王母の物語が、説話の変遷につれて画像に変化が現われることも明らかになった。これらは、作品と経典の相互の関係を把握する本論文の主旨から、両者の結びつきを示す証左になると考え、宗教上の違いはあるが一言付け加えることとした。

さらに、造像と史料の関係では、筆者が直接発掘に携わったウズベキスタンにおけるダルヴェルジン・テパの仏教遺跡において、当遺跡がこれまで西暦1-3世紀を中心としたとする見解に対して、出土コインの多寡や土器の分類、また仏像の形式や、仏像にみえる螺髪が存在等を検討し、西暦3-5世紀の可能性の高いことを明らかにした。そして2006年に筆者の行った発掘調査において、収集した遺品の炭素年代による分析結果で3-4世紀を示したことで、これまでの筆者の考察に近いことが明らかになり確信を深めた。

以上、第Ⅰ部から第Ⅲ部にかけて経典による図像の読解を中心に論じたが、加えて図像と史料の関係から導き出された年代の比定で美術史研究の基本が確立することを、具体的事例を検討してそれぞれ明らかにしたつもりである。これによって、大乘仏教の流伝状況が、地域や国を越えた大きなスケールの様相において見ることができしことを示したわけである。